

月溪恒子考

一尺八の科学的研究の道を拓いた人—

志村 哲



写真1. 最後のフィールドワーク。一節切・明暗真法流尺八研究家、相良保之氏と紀伊由良・興国寺・灌仏会の日、本堂と虚鈴庵で対談。(平成22年5月3日) 撮影：志村哲

本学音楽学科元教授・月溪恒子先生は、平成22年9月23日にご逝去されました。先生は、昭和47年に本学に着任され、世界されるその日まで、40年近くにわたって、大学の発展に尽力され、また我々を指導してくださいました。昭和19年のお生まれですから、まだ、やり残されたことがたくさんありであったであろうと考えますし、何よりも学内外の多くの方々が残念な思いのなかでお別れをしなければなりません。

んでした。

さて、本稿は、そのような先生のご経歴や本学でのご活躍を記そうとするものではなく、先生のもうひとつの顔である学者としての歩みを考察することを目的としています。そこで、先生の主要業績を文末に列挙してみました。すると、その約九割が尺八に関するものでした。そして、その「前半」の集大成は、1999年に大阪大学大学院文学研究科に提出された博士(文学)学位請求論文「尺八古典本曲の研究」(その公刊本は『尺八古典本曲の研究』(出版芸術社))(写真2)でありました。



写真2. 月溪恒子著『尺八古典本曲の研究』(出版芸術社)

ところで、こんにち尺八は、日本楽器のなかでも特に国際的に人気が高く、外国人の専門演奏家が多い楽器であり、また、尺八をテーマにした研究で博士の学位を持つ人数も圧倒的に欧米人が多いという不思議な現象が起っています。その理由のひとつは、尺八古典本曲は仏教禅宗の一派である普化宗の僧・虚無僧の尺八音楽であるということで、西洋人が20世紀に高く評価した日本の伝統文化の思想や精神性が音楽によって実践的に具現されているということ、そしてもうひとつは、西洋のフルートやリコーダが両手の10本の指でも押さえきれないほど指孔を増やして発展してきたのに対し、尺八は未だに5つの孔だけで、西洋の笛にはまったく模倣が不可能な演奏表現の技術を極めていることであると考えられます。そこで彼らは、実際に日本に滞在し、なかには禅寺で修行の体験をつんでから尺八の実技、研究に没頭するといった真摯な態度で臨んでいます。そして、彼らのほとんどが何らかの形で月溪先生のもとを訪れています。あるいは、先生の主宰された尺八研究会のメンバーや大学院研究員として本学で学び、海外の大学で学位を取得した人（たとえば、Riley Lee 博士や Kiku Day 博士など）もおられ、尺八研究者の間では、本学は「尺八研究の世界の中心地」として認知されてきました。これは、取りも直さず、先生の誰にも分け隔てなく、親身になって学問の指導をされるお人柄と、膨大な知識、見識をおもちになっていたところにあると思われます。

一方、私は、本学に籍をおかせていただいた昭和49年より、月溪先生にご指導いただき、他にも尺八独奏曲屈指の名曲《竹籟五章》^{ちくらいごしょう}を作曲された諸井誠先生、邦楽実技で尺八を教えておられた竹保流尺八開祖・酒井竹翁先生に学んだご縁から、徐々に尺八の世界にのめり込んで行きました。光栄なことに、先生には、ある時には研究助手として、またある時には共同研究者として、いくつかの論文の共著者にしていただきました。そこで、本稿はこの尺八研究者としての先生の業績の一端を解説することになります。

なお、他に本学と関わりのあるご業績として重要なものには、中国の音楽学院との交流から生まれた成果として「う

たう中国少数民族の過去と現在」『藝術11』（大阪芸術大学紀要）と、ベトナムを長期間にわたり現地調査された大プロジェクトの成果『音をかたちへーベトナム少数民族の芸能調査とその記録化』[中島貞夫（監）、月溪恒子・山口修（編）、共著]（醍醐書房）（写真3）のふたつがありますが、これらについては私は論じる力がありませんので、他の機会に、ご関係のある先生方に解説していただければ幸いです。さらに、本学ほか、いくつかの大学で採用されている教科書で日本音楽の歴史・理論・文化に関する教科書として、近著に『日本音楽との出会い 日本音楽の歴史と理論』（東京堂出版）（写真4）や『現代日本社会における音楽』[月溪恒子；北川純子；小塩さとみ（編）、共著]（放送大学教育振興会）がありますが、これらにつきましても、ここでは触れられませんので、ぜひ現物を手に取ってお読みいただきたく思います。



写真3. 中島貞夫（監）、月溪恒子・山口修（編）『音をかたちへーベトナム少数民族の芸能調査とその記録化』（醍醐書房）



写真4. 月溪恒子著『日本音楽との出会い 日本音楽の歴史と理論』(東京堂出版)

ところで、おそらく先生が最初に公にされた論文は、「尺八古典本曲の研究 - 構成法について」『音楽学』第15巻(一)、音楽学会、(1969) だと思いますが、これは、前年度に東京藝術大学大学院音楽研究科音楽学課程学位論文(修士)として提出されたものでした。先生はあるとき「大学でのゼミを選ぶときに、はじめは柴田南雄先生のゼミで現代音楽の研究がしたかったけれども、前述の諸井誠先生の尺八曲誕生に関わったご縁から、小泉文夫先生のゼミに配属され、尺八研究をする破目になった」と何度か言っておられました。これが、良かったということなのか、残念だったということなのか、今となっては、直接お聞きすることはできませんが、私はいつも「良かった」とおっしゃっておられると勝手に解釈しておりました。「破目になった」という表現は、若干の照れかご謙遜があつてのことで、実はこれらのことは卒業論文ですでに「尺八古典本曲」をテーマにされた後、自己の意思で修

士論文のテーマへと発展させておられたことから理解できます。

ところで、ご研究の中身の詳細につきましてはぜひ原著を参照していただきたいのですが、先生のよく語っておられた信念は、今もなお150曲が伝承されている尺八古典本曲は、ほとんどが作曲者の無い楽曲であり、かつ歴史的に多様に変化しながら伝播して、同名曲であっても様々に旋律や奏法が変化した異曲が存在するが、これが未だ混沌としたものではなく「人間が極めてきたものだから、必ずなにか音楽性を解き明かす原則が見つけ出せるはずだ」というものでした。そこで、まず、先生は西洋文化とは無縁でカタカナの覚書きのような楽譜しか存在しなかった古典本曲を、片っ端から西洋音楽で一般的に用いられている五線譜へ採譜することにより、構成原理をつかむことに成功されました。ただし、この作業は、今もなお、多くの問題をはらむこととして議論され続けています。その問題の大前提は、西洋の五線譜が情報を量で表せるのに対し、尺八ほか日本楽器の楽譜の記述方法が、指孔の押さえ方や音色など、情報の質が中心となっているところから、記譜者ごと、あるいは演奏様式ごとに表し方が異なるところにあります。つまり変換の方法の正当性が問われます。しかし、この先生の採られた研究過程は、演奏結果である音響現象を、ひとつの方向から光を当てて、先生のすぐれたフィルタを通した像から観察するということと、様々に色づけされた複雑な音楽の肉体を、一旦、X線透視図のように骸骨にして、その骨組みから分類するという意味で、その後の研究に多くの示唆を与えています。

つぎに先生が重視されたのは、フィールドワークによって、「今に生きる言葉」と文献・楽器などの諸資料から尺八伝承の仕組みや楽曲・奏法の変化の過程を観察することでした(写真1)。その結果、「無定形状態」での多様な楽曲のあり方にこそ楽曲のアイデンティティがあることをつきとめられ、その成果は、前述の博士学位請求論文に多くの事例と緻密な分析により結論付けられました。

ところで、当初、日本の国立である東京藝術大学であっても、尺八に関する論文は修士はおろか卒業論文にもひとつも

提出されておりました。さらに、尺八界においても、特に虚無僧尺八の領域は、外から見れば男同士の殺気立った世界にも映る近寄りたがたい雰囲気すら感じられたようです。先生は、「そのようななかで女子学生がひとりで録音機をかついでインタビューにやってきたので、いままではあまり他言されることのなかった情報を惜しげもなく聞かせてもらえた。また、たいへん親切に扱われ、資料も自由に拝借できた。」と言っておられました。

しかし、その後の先生の尺八研究は、成果が広く知られ価値が高まれば高まるほどに、様々な異論が唱えられるようになりました。もともと、一般には近寄りたがたい様相をみせる虚無僧尺八の世界では、個々人によって価値観も主張も異なり、かつそれらは過去に著された文献にも整合性の無い記述が散見される状態にありましたから、これらを科学的に捉えることは非常に困難でした。このようなケースの場合、すべての人が納得する答えを簡単には出せませんから、むしろそれらの意見は、我々の研究の多角化・学際化とプロジェクトチームの組織化のきっかけとなりました。

つぎに、見方を変えて21世紀の尺八界から過去を振り返ってみますと、もうひとつの不思議な現象が起こっています。音楽の長い歴史のなかで廃絶していった楽器や音楽はたくさんありますが、歴史上、登場した数種の尺八のなかには、今世紀に入って力強く蘇ってきたものがいくつもあります。たとえば16世紀後半から17世紀にかけて活躍した一節切尺八とその音楽、そして、江戸時代に発展した前述の虚無僧尺八は、現在、愛好家が急速に増えてきています。後者に関しましては、もう少し説明が必要なのですが、20世紀にも愛好家の多かったこの尺八は、明治維新以降の西洋音楽の流入によって、楽器尺八の構造は、その音楽の様式でも演奏できるように改造(たとえばフルートのような性能を目指したものを「地塗^{じぬ}り尺八」や「多孔^{なこう}尺八」と呼ぶ。)されてきましたが、その結果、虚無僧尺八^{じゆ}の伝承者が使用してきた江戸時代の楽器構造(こんにちこれを「地無^{じゆ}し尺八」と呼ぶ)や奏法と大きくかけ離れた楽器に成長してきました。ところが、21世紀に入って、この違いが音色や演

奏様式の違いを決定付ける大問題であることが広く知られるようになり、もう一度、我が国が日本文化の独自性を再評価する動きと結びついて、江戸時代の製作方法である「地無し尺八」の復元およびその発展形の追究が各地で始められています。もちろん、20世紀を通じて伝承者の間では継承されてきた技術でしたが、音楽界の変化が後継者不足を呼び、社会的維持が困難なところまでできていました。そのような状況に警鐘を鳴らしてくれたのは、フィールドワーク先での伝承者・諸先生の言説に加え、熱心な外国人尺八家の活動であったと思います。そこで、我々は歴史的楽器の現物、楽譜、文献の収集に加え、録音・録画作業に力を入れました。

また、そのためには、膨大な資料の公表と分析の時間がこれからも必要になると考え、資料の収集と研究の国際化に寄与するためのいくつかのプロジェクトが展開されました。たとえば、日英二言語で出版された『尺八研究ハンドブックにむけて - 古典本曲研究の過去と現在』(Toward a handbook of *syakuhati* study - classical *syakuhati honkyoku*, the past and present.) [月溪恒子・山口修(共編)、共著](尺八研究会)(写真5)や『尺八の基礎資料収集とデータベース構築の試案 - 国内・国際的利用に供するために』[尺八研究会(編)、共著]平成1~3年度文部省科学研究費補助研究成果報告書(研究代表者:月溪恒子)(写真6)がそれにあたります。そのなかで、私は楽器調査と演奏法の習得・分析および、当時、我々の手にも入るようになったコンピュータを使ったデータベース化の作業を担当しましたが、ここで得られた知見とノウハウは、その後、設置された本学通信教育部音楽学科の専門科目「音楽データベース1,2」および、芸術学部音楽学科「音楽データベース演習」と卒業制作関連科目で「IT社会のための情報音楽 Web 博物館」(写真7)へと発展しています。

なお本稿は、巻末にあげたおびただしい数の文献ひとつひとつに言及することはできませんので、最後にもうひとつだけ先生の研究に対する姿勢について記しておきたいと思います。私は、先生との長期にわたるフィールドワークの過程で多くの伝承者から様々な楽器を見せていただき、それらの

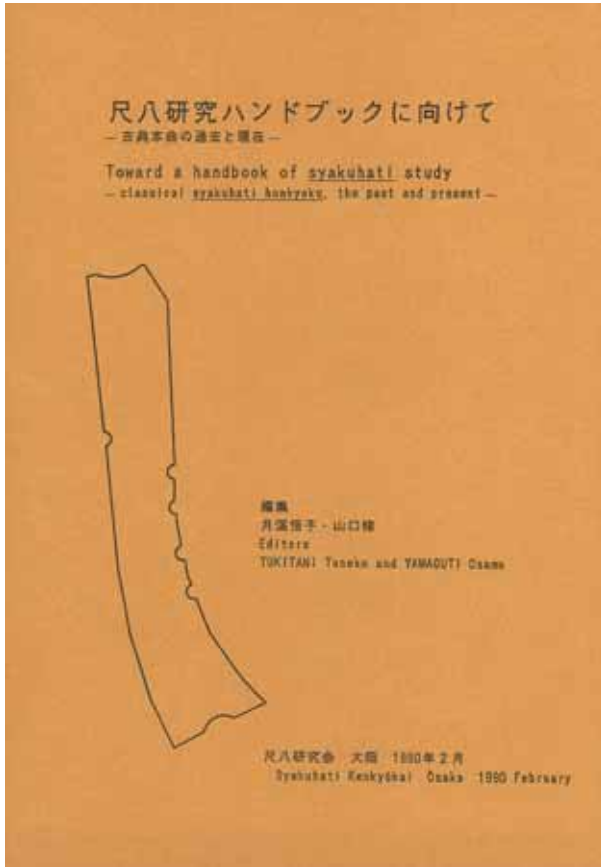


写真5. 月溪恒子・山口修 (共編)『尺八研究ハンドブックにむけて-古典楽曲研究の過去と現在』(尺八研究会)



写真6. 尺八研究会 (編)『尺八の基礎資料収集とデータベース構築の試案 - 国内・国際的利用に供するために』(研究代表者: 月溪恒子)

演奏上の留意点を学ばせていただくことができました。そのご縁は、今でも続いており、私の研究の基盤になっています。一方、月溪先生は、ほとんど尺八を吹かれません。そこで、尺八家のなかには「尺八を吹かない者に何が分かる?」ということと言われる方もおられました。私は、「演奏されないから分かることもあると思います」とそれらの問いに答えましたが、実際には先生には尺八を稽古する時間は無かったと思います。また、私は、ある大学院生に「志村先生は研究と演奏が両立できてすごいですね。どうすれば、そんなことができるのですか?」と問われたことがあります。私は「それには、当分はどちらかを止めることです。」と答えました。私には創作と研究は、相反する行為にしか感じられず、両立は不可能だと思っていたからです。おそらく、人生に与えら



写真7. 大阪芸術大学通信教育部音楽学科 Webサイト「IT社会のための情報音楽 Web 博物館」(トップページ)

れた時間が二倍あれば、創作にかける人生と研究にかける時間を二分して、ある程度、人並みのことができるかもしれ

ませんが、それは叶わない望みです。ましてや、人生がいつ終わるかは誰にも分からず、かつ一個人の研究が理想的な到達点に届くことは無いはずです。そこで、先生はきっぱりと「私は演奏はしません」と言い切っておられました。今、続けている研究が大切であればあるほど、時間は疎かにはできず、また、吹いている人と思考回路が違うところに科学的アプローチが成り立ったのだと私は考えます。そして、尺八の音楽学的研究でその道を拓いた最初の学者が月溪先生であり、それがあったからこそ、我々、後に続くものが非常にたくさん研究テーマを得ることができたわけです。また、その功績は、平成14年度 第14回小泉文夫音楽賞において「尺八研究に対する卓抜した貢献に対して」という授賞理由で顕彰されました。

我々、先生に教えを受けた者たちにとりましては、先生のご研究テーマは、我々が二倍の時間の人生があっても届かないであろうほどの量と広がりがあります。これを、先に進めるためにはもっと多くのご指導をいただきたかったわけですが、告別式のご遺族代表・内野様のご挨拶のなかに、「恒子は研究はまだ半ば、もっとやりたいことがあったようだ」とあり、これは我々への叱咤激励とも取れる忘れてはいけないお言葉でした。私個人としましては、平成22年9月23日の国立劇場主催「尺八の会」出演のため、上京する前夜に先生の病室へお見舞いに伺い、先生に励まされながら演奏に向かいましたが、演奏本番の数時間後、先生はご逝去されてしまいました。この時の、「尺八本曲について」『尺八の会』国立劇場 第152回邦楽公演プログラム（日本芸術文化振興会）（写真8）が、先生の絶筆となりました。また、演奏曲目、高橋悠治作曲、地無し尺八のための《偲しめび》がお見送りする曲になってしまいました。そして、この先生とのご生前、最後の共同研究の成果が、おそらく国立劇場始まって以来、その曲目に、虚無僧尺八本来の楽器構造である「地無し尺八」が明記されたプログラムであったことも、「あなたはこれで行きなさい」という先生のお導きであったと受け留めております。

幸いにして尺八研究の世界の中心地で育てられた我々、先生の教え子は、その灯が消えないよう、各自が与えられた

環境下で前進していかなければならないと思っております。先生が、博士論文には含めず、我々に託されたであろう研究の「後半」を進めるために。そして、再び、尺八ブーム、日本文化再発見のブームが訪れたときに、新しい情報発信の拠点となるよう態勢を調べておきたいと考えます。

本稿は、当初、本学芸術研究所より「月溪恒子論」を執筆するよう要請を受け推敲しましたが、私ひとりの力で限られた短い時間に「論」まで進めてはいけなと感じましたので、「月溪恒子考」とさせていただきます。今後、ご縁のあった多くの方々が本稿の至らない部分を補って下さることを祈念するとともに、その礎の一角にでもなるようにと考え、調べられる範囲で先生のご著書を以下に掲載させていただきました。心より、先生のご冥福をお祈りいたします。月溪恒子先生、ありがとうございました。

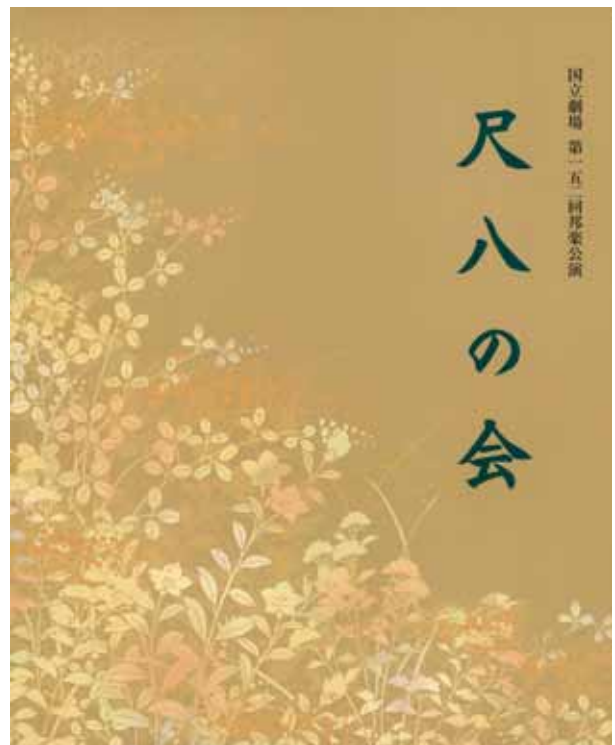


写真8. 国立劇場 第152回邦楽公演プログラム「尺八の会」(日本芸術文化振興会)

<月溪恒子先生 主要業績>

●単著・編著書

『楽の器』[共編著]東京：弘文堂、昭和63年(1988)
『尺八研究ハンドブックにむけて - 古典本曲研究の過去と現在』
(Toward a handbook of *syakuhati* study - classical *syakuhati honkyoku*,
the past and present.) [月溪恒子・山口修(共編)、共著]大阪：尺八研究会、
平成2年(1990)

Tradition and its future in music: report of SIMS 1990 Ōsaka.
[TOKUMARU Yoshihiko; OHMIYA Makoto; KANAZAWA Masakata;
YAMAGUTI Osamu; TUKITANI Tuneko; TAKAMATSU Akiko;
SHIMOSAKO Mari (eds.)], Tōkyō; Ōsaka: Mita Press、平成3年(1991)

『尺八の基礎資料収集とデータベース構築の試案 - 国内・国際的利用
に供するために』[尺八研究会(編)、共著]平成1~3年度文部省科学
研究費補助研究成果報告書(研究代表者：月溪恒子)、平成4年(1992)
『尺八古典本曲の研究』東京：出版芸術社、平成12年(2000)(大阪大
学大学院文学研究科学学位請求論文の公開)

『日本音楽の歴史と理論』大阪：大阪芸術大学通信教育部、平成13年
(2001)

*The Garland encyclopedia of world music 7 East Asia: China, Japan,
and Korea.* [Provine, R.; Tokumaru, Y.; Witzleben, L. (eds.)] New York;
London: Routledge、平成14年(2002)：日本部分の共編者。

『日本音楽の世界への発信』平成13、14年度(学校法人)塚本学院教育
研究補助費研究成果報告書、平成15年(2003)

『音をかたちへ - ベトナム少数民族の芸能調査とその記録化』[中島
貞夫(監)、月溪恒子・山口修(編)、共著]京都：醍醐書房、平成18年
(2006)

『現代日本社会における音楽』[月溪恒子：北川純子：小塩さとみ(編)]
東京：放送大学教育振興会、平成20年(2008)

『幽玄なる響 - 人間国宝・山口五郎の尺八と生涯』[徳丸吉彦(監)、月
溪恒子・徳丸十盟・斎藤完(編)]東京：出版芸術社、平成20年(2008)

『日本音楽との出会い 日本音楽の歴史と理論』東京：東京堂出版、平
成22年(2010)

●論文等(掲載ページは省略)

「尺八古典本曲の研究 - 構成法について」『音楽学』第15巻(一)、音
楽学会、昭和44年(1969)

「尺八古典本曲における同名異曲の問題」『日本音楽とその周辺(吉川
英史先生還暦記念論文集)』[小泉文夫・星旭・山口修(編)]東京：音楽
之友社、昭和48年(1973)

「ウガンダの生活と音楽」[森淳・諸井誠・月溪恒子(共著)]『藝術2』、大
阪芸術大学紀要、昭和48年(1973)

「尺八の譜」『日本と世界の楽譜(楽譜の世界3)』[小泉文夫(監)、NHK
交響楽団(編)]東京：日本放送出版協会、昭和49年(1974)

「尺八の種類と歴史」『季刊邦楽』5号、東京：邦楽社、昭和50年(1975)
「尺八諸流の流祖をたずねる」『季刊邦楽』10号、東京：邦楽社、昭和
52年(1977)

「普及尺八研究の現状と課題」『藝術4』、大阪芸術大学紀要、昭和52年
(1977)

「尺八曲の『すががき』」『季刊邦楽』21号、東京：邦楽社、昭和54年
(1979)

「尺八古典本曲『松巖軒鈴慕』考」『花巻市文化財調査報告書』第8集、
昭和57年(1982)

「尺八古典本曲の伝承考察 - レパートリーの形成と変容」『諸民族の
音(小泉文夫先生追悼論文集)』[編集委員会(編)]東京：音楽之友社、
昭和61年(1986)

「天吹の音楽学的研究」『天吹』[天吹同好会(編)]鹿児島：天吹同好会、
昭和61年(1986)

「尺八の構造について」[安藤由典・月溪恒子・前田雅一郎(共著)]『音楽
と音楽学(服部幸三先生還暦記念論文集)』[角倉一郎・高野紀子・東川
清一・渡部恵一郎(編)]東京：音楽之友社、昭和61年(1986)

「普及尺八の拡散と交流」『岩波講座 日本の音楽・アジアの音楽(3
伝播と変容)』[蒲生郷昭・柴田南雄・徳丸吉彦・平野健次・山口修・横道
萬里雄(編)]東京：岩波書店、昭和63年(1988)

「海を二度わたった日本の古管」[月溪恒子・志村哲・柳知明(共著)]『楽
器のかたち展』(目録)、大阪：ベルギーフランドル博物館、昭和63年
(1988)

「中国少数民族の音楽」[月溪恒子・杜亜雄・陳銘道(共著)]『岩波講座
日本の音楽・アジアの音楽(別巻I 手引と資料I)』[蒲生郷昭・柴
田南雄・徳丸吉彦・平野健次・山口修・横道萬里雄(編)]東京：岩波書店、
平成1年(1989)

「尺八家系譜」『日本音楽大事典』[平野健次・上参郷祐康・蒲生郷昭
(監)](付録+系図)東京：平凡社、平成1年(1989)

「うたう中国少数民族の過去と現在」『藝術11』、大阪芸術大学紀要、昭
和64年(1989)

「出雲路の調べ - 木幡家旧蔵尺八・雅楽史料調査記」『季刊邦楽』62
号、東京：邦楽社、平成2年(1990)

「音楽のエスニシティ」『音は生きている(芸術学フォーラム6)』[谷村
晃・山口修・畑道也(編)]東京：勁草書房、平成3年(1991)

“Distant calls of deer: an invitation to the world of classical *syakuhati*
(shakuhachi) honkyoku” (special event) [TUKITANI Tuneko; SIMURA
Satosi; SEYAMA Tōru; Riley Kelly LEE; YUKINO Tomoko (The
Syakuhati Kenkyūkai) (共著)], *Tradition and its future in music: report
of SIMS 1990 Ōsaka.* [TOKUMARU, Y. et al. (eds.)] Proceedings of the
Fourth Symposium of the International Musicological Society, 1990 July,
Ōsaka, Tōkyō; Ōsaka: Mita Press、平成5年(1993)

“Simplicity as complexity: technicalities and aesthetics of Japanese musical
instruments and music”, [Simura, Satoshi; Tukitani, Tuneko; Seyama, Tōru;

Yamaguti, Osamu (共著)] Proceedings of the International Computer Music Conference 1993、平成5年(1993)

“The *shakuhachi*: the instrument and its music, change and diversification”, [Tukitani, Tuneko; Seyama, Tôru; Simura, Satoshi (共著)] *Contemporary Music Review* vol.8 (2), Switzerland: Harwood Academic Publishers、平成6年(1994)

「集大成『鶴の巢籠』』『邦楽ジャーナル』101号、東京: 邦楽ジャーナル、平成7年(1995)

「尺八古典本曲が伝承される時」『音の今昔』[櫻井哲男・山口修(編)] 東京: 弘文堂、平成8年(1996)

“Techniques of Making the *Taiko* (Drums)”, Tukitani, Tuneko; Ochi, Megumi [共著], *DER“SCHÖNE” KLANG* [Dieter Krickeberg (ed.)] Nürnberg: Verlag des Germanischen Nationalmuseums、平成8年(1996)

「『阿字観』『薩慈』の秘密」『邦楽ジャーナル』113号、東京: 邦楽ジャーナル、平成8年(1996)

「吉川英史監修『琴古流尺八本曲指南』(視聴覚資料評)、「塚本虚堂著『塚本虚堂集 古典尺八及び三曲に関する小論集』」、(書籍紹介)『東洋音楽研究』61号、東洋音楽学会、平成8年(1996)

「虚無僧のおくりもの」(1~26)『邦楽ジャーナル』135~160号に毎月連載、平成10~12年(1998~2000)

“Musical profile of Japan”, Tokumaru, Yoshihiko; Tukitani, Tuneko [共著] *The Garland encyclopedia of world music volume 7 East Asia: China, Japan, and Korea*. [Provine, R; Tokumaru, Y; Witzleben, L (eds.)] New York; London: Routledge、平成14年(2002)

「書評: 『日本の語り物 - 口頭性・構造・意義』」『音楽学』第49巻(2)、東京: 日本音楽学会、平成16年(2004)

「竹韻随想」『楽報』949号より奇数月に連載、京都: 財団法人都山流尺八楽会、平成17~22年(2005~2010)

“The *shakuhachi* and its music”, *The Ashgate research companion to Japanese music*. [Tokita, A.; Hughes, D. (eds.)] Aldershot, England: Ashgate、平成20年(2008)

「尺八楽」『日本の伝統芸能講座 音楽』[小島美子(監)、国立劇場(編)] 京都: 淡交社、平成20年(2008)

「尺八本曲について」『尺八の会』国立劇場 第152回邦楽公演(9月23日)プログラム、東京: 日本芸術文化振興会、平成22年(2010)(絶筆)
その他、多くの辞典・事典項目、雑誌記事、論説等、多数執筆

●視聴覚資料監修、解説等

「尺八楽 - 歴史と特質」『尺八1969』(LPレコードアルバム解説書)、東京: 日本クラウン(SWS-3)、昭和44年(1969)

「尺八楽の特色」『(邦楽大系4) 箏曲・尺八 二』[岸辺成雄(編)]、(LPレコードアルバム解説書) 東京: 筑摩書房

「曲目解説」「訳譜」『吹禅 竹保流にみる普化尺八の系譜』(LPレコードアルバム解説書) 東京: 日本コロムビア(KX-7001~3)、昭和49年

(1974)

「尺八本曲の『鶴の巢籠』」『胡弓 日本の擦弦楽器』(LPレコードアルバム解説書) [平野健次(監)] 東京: 日本フォノグラム(PH-8514~18)

「古典本曲の音楽的特徴」「同名異曲と異名同曲 - 『三谷』『巢籠』『鈴慕』『さし』をめぐって」『古典本曲の集大成者 神如道の尺八』[上参郷祐康(監)] 東京: テイチク(GM-6005~10)、昭和55年(1980)

「神如道の尺八譜」[月溪恒子・上参郷祐康(共著)] [上参郷祐康(監)] 昭和55年(1980)(前掲書)

「根笹派錦風流について」「曲目解説」『酒井松道 竹を吹く 第二集 根笹派錦風流尺八本曲全集』大阪: 私家版、平成2年(1990)

『集大成「秘曲」鶴の巢籠』(ビデオ・テープVHS) [月溪恒子(監)] 東京: オフィス・サウンドポット、平成7年(1995)

『「阿字観」「薩慈」の秘密』(ビデオ・テープVHS) [月溪恒子(監)] 東京: オフィス・サウンドポット、平成8年(1996)

『酒井松道《鶴の巢籠》五態』[監修・解説] 東京: コジマ録音(EBISU-12)、平成18年(2006)

(平成23年6月 志村哲 編集)